

純情小曲集

MCMXXV

新潮出版社



純情小曲集

萩原勇太郎著



純情小曲集

MCMXXV

版出社潮新

純情小曲集

萩原朔太郎著



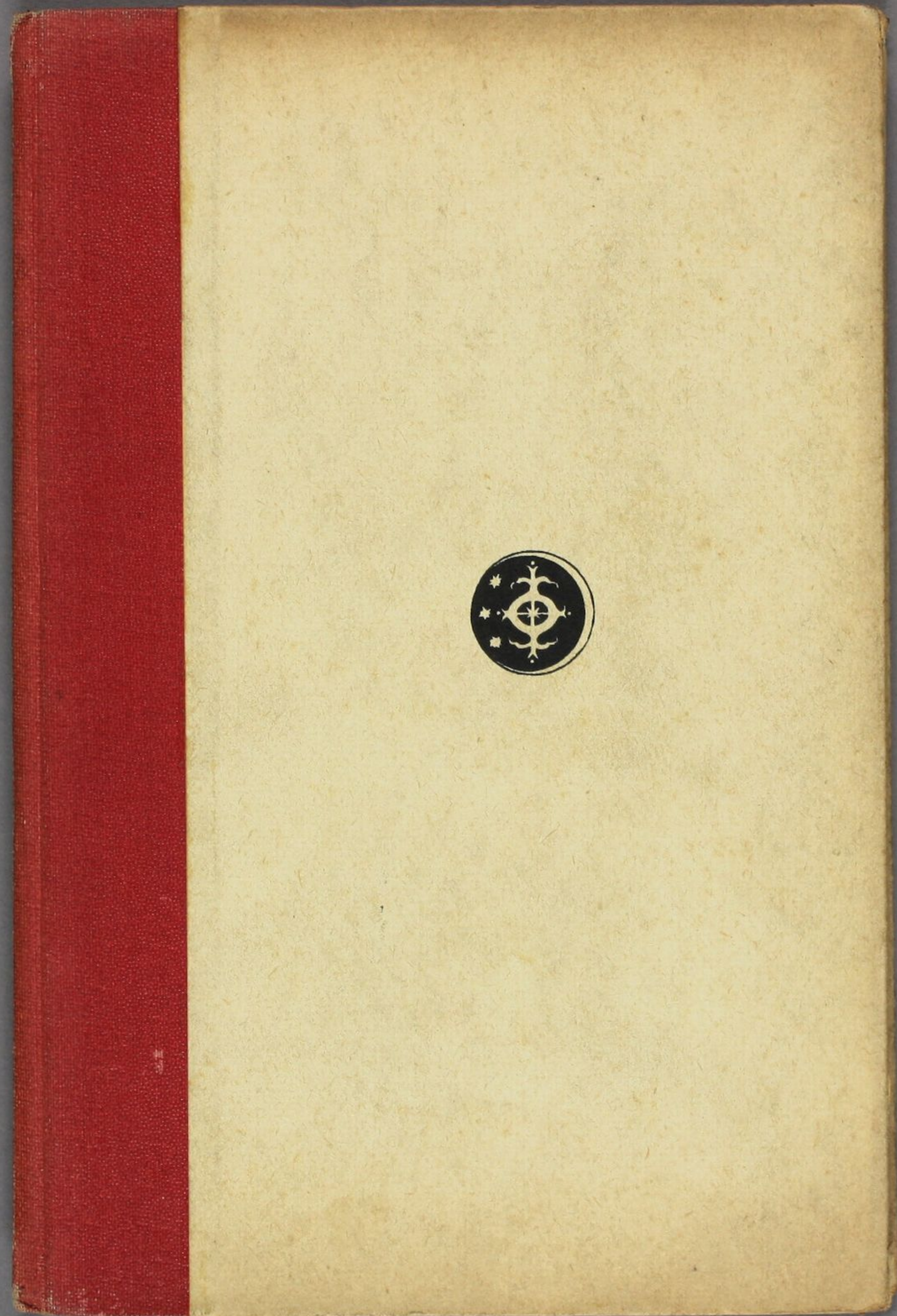
純情小曲集

銅版畫入

西歷一九二五年 東京版

純情小曲集

萩原朔太郎著



萩原前太郎

純情小曲集

萩原朔太郎著

新潮社出版

北原白秋氏に捧ぐ

珍らしいものをかくして
ゐる人への序文

萩原の今ある二階家から本郷動坂あたりの町家の屋根が見え、木立を透いて赤い色の三角形の支那風な旗が、いつも行くごとに閃めいて見えた。このごろ木立の若葉が茂り合つたので風でも吹いて樹や莖が動かないとその赤色の旗が見られなかつた。

「惜しいことをしたね。」

しかし萩原はわたしのこの言葉にも例によつて無關心な
顔貌をした。

或る朝、萩原は一帖の原稿紙をわたしに見せてくれた。
いまから十三四年前に始めてわたしが萩原の詩をよんだと
きの、その原稿の綴りであつた。わたしは読み終へてから
何か言はうとしたが、それよりもわたしが受けた感銘はか
なりに繊く鋭どかつたので、もう一度黙つて原稿を繰りか
へして讀んで見た。そしてやはり頭につうんと來る感銘が
深かつた。いいフィルムを見たときにつうんとくる涙つほ

い種類の快よさであつた。わたしはすぐ自分のむかしの詩
を思ひ返して、萩原もいい詩をかいて永い間世に出さなか
つたものだ、無關心で、無頓着げなかれの性分の中に或
る奥床しさをかんじた。かれは何か絶えずもの珍らしいも
のを祕かにしまつてゐるやうな人がらである。

五月二十一日朝

犀 星 生

自序

やさしい純情にみちた過去の日を記念するために、このうすい葉つばのやうな詩集を出すことにした。「愛憐詩篇」の中の詩は、すべて私の少年時代の作であつて、始めて詩といふものをかいたころのなつかしい思ひ出である。この頃の詩風はふしぎに典雅であつて、何となくあやめ香水の匂ひがする。いまの詩壇からみればよほど古風のものであらうが、その頃としては相當に珍らしいすたいるでもあつた。

ともあれこの詩集を世に出すのは、改めてその鑑賞的評價を問ふ

ためではなく、まづたく私自身への過去を追憶したいためである。
あるひとの來歴に對するのすたるぢやとも言へるだらう。

「郷土望景詩」十篇は、比較的最近の作である。私のながく住んでゐる田舎の小都邑と、その附近の風物を咏じ、あはせて私自身の主觀をうたひこんだ。この詩風に文語體を試みたのは、いささか心に激するところがあつて、語調の烈しきを欲したのと、一にはそれが、咏嘆的の純情詩であつたからである。ともあれこの詩篇の内容とスタイルとは、私にしては分離できない事情である。

「愛憐詩篇」と「郷土望景詩」とは、創作の年代が甚だしく隔たるために、詩の情操が根本的にちがつてゐる。(したがつてまたその音律もちがつてゐる。)しかしながら共に純情風のものであり、咏嘆的文語調の詩である故に、あはせて一冊の本にまとめた。私の一般的な詩風からみれば、むしろ變り種の詩集であらう。

私の藝術を、とにかくにも理解してゐる人は可成多い。私の人物と生活とを、常に知つてゐる人も多少は居る。けれども藝術と生活とを、兩方から見えてゐる知己は殆んど居ない。ただ二人の友人だけが、詩と生活の兩方から、私に親しく往來してゐた。一人は東京の詩友室生犀星君であり、一人は郷土の詩人萩原恭次郎君である。

この詩集は、詩集である以外に、私の過去の生活記念でもある故に、特に書物の序と跋とを、二人の知友に頼んだのである。

西曆一九二四年春

利根川に近き田舎の小都市にて

著 者

出版に際して

昨年の春、この詩集の稿をまとめてから、まる一年たつた今日、漸く出版する運びになつた。この一年の間に、私は住み慣れた郷土を去つて、東京に移つてきたのである。そこで偶然にもこの詩集が、私の出郷の記念として、意味深く出版されることになつた。

郷土！いま遠く郷土を望景すれば、萬感胸に迫つてくる。かなしき郷土よ。人々は私に情なくして、いつも白い眼でにらんでゐた。單に私が無職であり、もしくは變人であるといふ理由をもつて、あはれな詩人を嘲辱し、私の背後から唾をかけた。「あすこに白痴が歩

いて行く。」さう言つて人々が舌を出した、

少年の時から、この長い時日の間、私は環境の中に忍んでゐた。さうして世と人と自然を憎み、いつさいに叛いて行かうとする、卓抜なる超俗思想と、叛逆を好む烈しい思惟とが、いつしか私の心の隅に、鼠のやうに巢を食つていつた。

いかんぞ いかんぞ思惟をかへさん

人の怒のさびしさを、今こそ私は知るのである。さうして故郷の家をのがれ、ひとり都會の陸橋を渡つて行くとき、涙がゆゑ知らず

流れてきた。えんえんたる鐵路の涯へ、汽車が走つて行くのである。

郷土！私のなつかしい山河へ、この貧しい望景詩集を贈りたい。

西曆一九二五年夏

東京の郊外にて

著 者

純情小曲集目次

珍らしきものをかく
してゐる人への序文

室生犀星

自序

出版に際して

愛憐詩篇

夜汽車

こ	こ	ろ	よ	上	魚	物	涙	蟻地獄	利根川のほとり	濱邊
……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……
二六	二六	二六	二六	三三	三四	三五	三六	三六	四〇	四二

綠	再	地	花	初夏の印象	洋銀の皿	月光と海月
蔭	會	上	鳥			
.....
四四	四六	四八	五〇	五二	五四	五六

郷土望景詩

中學の校庭	波宜亭	二子山附近	才川町	小出新道	新前橋驛	大渡新橋	廣瀬川	利根の松原	公園の椅子
.....
六〇	六三	六四	六六	六八	七〇	七三	七五	七六	七八

郷土望景詩の後に

I 前橋公園	八三
II 大渡橋	八三
III 新前橋驛	八三
VI 小出松林	八四
V 波宜亭	八四
IV 前橋中學	八五
跋	萩原恭次郎七

純情小曲集

愛憐詩篇

夜 汽 車

有明のうすらあかりは
硝子戸に指のあとつめたく
ほの白みゆく山の端は
みづがねのごとくにしめやかなれども
まだ旅びととのねむりさめやらねば
つかれたる電燈のためいきばかりこちたしや。
あまたるきにすのにほひも

そこはかとなきはまきたばこの烟さへ
夜汽車にてあれたる舌には佗しきを
いかばかり人妻は身にひきつめて嘆くらむ。
まだ山科は過ぎずや
空氣まくらの口金をゆるめて
そつと息をぬいてみる女ごころ
ふと二人かなしさに身をすりよせ
しのめちかき汽車の窓より外をながむれば
ところもしらぬ山里に
さも白く咲きてゐたるをだまきの花。

こころ

こころをばなにとへん

こころはあぢさゐの花

ももいろに咲く日はあれど

うすむらさきの思ひ出ばかりはせんなくて。

こころはまた夕闇の園生のふきあげ

音なき音のあゆむひびきに

こころはひとつによりて悲しめども

かなしめどもあるかひなしや

ああこのこころをばなにとへん。

こころは二人の旅びと

されど道づれのたえて物言ふことなければ

わがこころはいつもかくさびしきなり。

女
よ

うすくれなるにくちびるはいろどられ
粉おしろいのほひは襟脚に白くつめたし。

女よ

そのごむのごとき乳房をもて

あまりに強くわが胸を壓するなかれ

また魚のごときゆびさきもて

あまりに狡猾にわが背中をばくすぐるなかれ

女よ

ああそのかぐはしき吐息もて

あまりにちかくわが顔をみつむるなかれ

女よ

そのたはむれをやめよ

いつもかくするゆゑに

女よ 汝はかなし。

櫻

櫻のしたに人あまたつどひ居ぬ
なにをして遊ぶならむ。
われも櫻の木の下に立ちてみたれども
わがこころはつめたくして

花びらの散りておつるにも涙こぼるるのみ。
いとほしや
いま春の日のまひるとき
あながちに悲しきものをみつめたる我にしもあらぬを。

旅
上

ふらんすへ行きたしと思へども
ふらんすはあまりに遠し
せめては新しき背廣をきて

きままなる旅にいでてみん。
汽車が山道をゆくとき
みづいろの窓によりかかりて
われひとりうれしきことをおもはむ
五月の朝のしののめ
うら若草のもえいづる心まかせに。

金魚

金魚のうろこは赤けれども
その目のいろのさびしさ。
さくらの花はさきてほころべども
かくばかり
なげきの淵たがひに身をなげすてたる我の悲しさ。

静物

静物のところは怒り
そのうはべは哀しむ
この器物うつはの白き腫うはにうつる
窓ぎはのみどりはつめたし。

涙

ああはや心をもつばらにし
われならぬ人をしたひし時は過ぎゆけり
さはさりながらこの日また心悲しく
わが涙せきあへぬはいかなる戀にかあるらむ
つゆばかり人を憂しと思ふにあらねども
かくありてしきものの上に涙こぼれしをいかにすべき

ああげに今こそわが身を思ふなれ
涙は人のためならで
我のみをいとほしと思ふばかりに嘆くなり。

蟻地獄

ありぢごくは蟻をとらへんとて
おとし穴の底にひそみかくれぬ
ありぢごくの貪婪たんらんの腫はれに
かげろふはちらりちらりと燃えてあさましや。

ほろほろと砂のくづれ落つるひびきに
ありぢごくはおどろきて隠れ家をはしりいづれば
なにかしらねどうす紅く長さものが走りて居たりき。
ありぢごくの黒い手脚に
かんかんと日の照りつける夏の日のまつびるま
あるかなきかの蟲けらの落す涙は
草の葉のうへに光りて消えゆけり。
あとかたもなく消えゆけり。

利根川のほとり

きのふまた身を投げんと思ひて
利根川のほとりをさまよひしが
水の流ればやくして
わがなげきせきとむるすべもなければ
おめおめと生きながらへて
今日もまた河原に來り石投げてあそびくらしつ。
きのふけふ

ある甲斐もなきわが身をばかくばかりいとしと思ふうれしさ
たれかは殺すとするものぞ
抱きしめて抱きしめてこそ泣くべかりけれ。

濱邊

若ければその瞳も悲しげに
ひとりはなれて砂丘を降りてゆく
傾斜をすべるわが足の指に
くづれし砂はしんと落ちきたる。
なにゆゑの若さぞや

この身の影に咲きいづる時無草もうちふるへ
若き日の嘆きは貝殻もてすくふよしもなし。
ひるすぎて空はさあをにすみわたり
海はなみだにしめりたり
しめりたる浪のうちかへす
かの遠き渚に光るはなにの魚ならむ。
若ければひとり濱邊にうち出でて
音もたてず洋紙を切りてもてあそぶ
このやるせなき日のたはむれに
かもめどり涯なき地平をすぎ行けり。

緑 蔭

朝の冷し肉は皿につめたく

せりいはさかづきのふちにちちと鳴けり

夏ふかきえにしだの葉影にかくれ

あづまやの籐椅子いすによりて二人をかたらむ。

さんさんとふきあげの水はこぼれちり

さふらんは追風つづかぜにしてにほひなじみぬ。

よきひとの側へにありてなにをかたらむ

すずろにもわれは思ふ系ねちやのかあにばるを

かくもやさしき君がひとみに

海こえて燕雀のかけもうつらでやは。

もとより我等のかたらひは

いとうすきびいどろの玉をなづるがごとし

この白き鋪石をぬらしつつ

みどり葉のそよげる影をみつめれば

君やわれや

さびしくもふたりの涙はながれ出でにけり。

再會

皿にはをどる肉さかな

春夏すぎて

きみが手に銀のふほをくはおもからむ。

ああ秋ふかみ

なめいしにこほろぎ鳴き

ええてるは玻璃をやぶれど

再會のくちづけかたく凍りて

ふんすゐはみ空のすみにかすかなり。

みよあめつちにみづがねながれ

しめやかに皿はすべりて

み手にやさしく腕輪はづされしが

眞珠ちりこぼれ

ともしび風にぬれて

このにほふ鋪石はしろがねのうれひにめざめむ。

地上

地上にありて
愛するものの伸長する日なり。
かの深空にあるも
しづかに解けてなごみ
燐光は樹上にかすかなり。
いま遙かなる傾斜にもたれ
愛物どもの上にも

わが輝やく手を伸べなんとす
うち見れば低き地上につらなり
はてしなく耕地ぞひるがへる。
そこはかと愛するものは伸長し
ばんぶつは一所いっしょにあつまりて
わが指さすところを凝視せり。
あはれかかる日のありさまをも
太陽は高き真空にありておだやかに觀望す。

花
鳥

花鳥はなとりの日はきたり

日はめぐりゆき

都に木の芽つ**い**ばめり。

わが心のみ光りいで

しづかに水脈みづなをかきわけて

いまぞ岸邊に魚を釣る。

川浪にふかく手をひたし

そのうるほひをもてしたしめば

かくもやさしくいだかれて

少女子どもはあるものか。

ああうらうらともえいでて

都にわれのかしまだつ

遠見にうかぶ花鳥のけしきさへ。

初夏の印象

昆蟲の血のながれしみ
ものみな精液をつくすにより
この地上はあかるくして
女の白き指よりして
金貨はわが手にすべり落つ。
時しも五月のはじめつかた。

幼樹は街路に泳ぎいで
びよびよと芽生は萌えづるぞ。
みよ風景はいみじくながれきたり
青空にくつきりと浮びあがりて
ひとびとのかけをしんにあきらかに映像す。

洋銀の皿

しげる草むらをたづねつつ
なにをほしさに呼ばへるわれぞ
ゆくゆく葉うらにささくれて
指も真紅にぬれぬれぬ。
なほもひねもすはしりゆく
草むらふかく忘れつる
洋銀の皿をたづね行く。

わが哀しみにくるめける
ももいろうすき日のしたに
白く光りて涙ぐむ
洋銀の皿をたづねゆく
草むら深く忘れつる
洋銀の皿はいづこにありや。

月光と海月

月光の中を泳ぎいで
むらがるくらげを捉へんとす
手はからだをはなれてのびゆき
しきりに遠きにさしのべらる
もぐさにまつはり
月光の水にひたりて

わが身は玻璃のたぐひとなりはてしか
つめたくして透きとほるもの流れてやまざるに
たましひは凍えんとし
ふかみにしづみ
溺るるごとくなりて祈りあぐ。

かしここにここにむらがり
さ青にふるへつつ
くらげは月光のなかを泳ぎいづ。

鄉土望景詩

中學の校庭

われの中學にありたる日は
艶めく情熱になやみたり
いかりて書物をなげすて
ひとり校庭の草に寝ころび居しが
なにももの哀傷ぞ

はるかに青きを飛びさり
天日直射して熱く帽子に照りぬ。

波宜亭

少年の日は物に感ぜしや
われは波宜亭の二階によりて
かなしき情歡の思ひにしづめり。
その亭の庭にも草木茂み
風ふき渡りてばうばうたれども

かのふるき待たれびとありやなしや。
いにしへの日には鉛筆もて
欄干にさへ記せし名なり。

二子山附近

われの悔恨は酔えたり
さびしく蒲公英の莖を噛まんや。
ひとり畝道をおるき
つかれて野中の丘に坐すれば
なにごとの眺望かゆいて消えざるなし。

たちまち遠景を汽車のはしりて
われの心境は動擾せり。

才川町

—十二月下旬—

空に光つた山脈
それに白く雪風
このごろは道も悪く
道も雪解けにぬかつてゐる。
わたしの暗い故郷の都會
ならべる町家の家並のうへに

かの火見櫓をのぞめるごとく
はや松飾りせる軒をこえて
才川町こえて赤城をみる。
この北に向へる場末の窓々
そは黒く煤にとざせよ
日はや霜にくれて
荷車巷路に多く通る。

小出新道

ここに道路の新開せるは
直として市街に通ずるならん。
われこの新道の交路に立てど
さびしき四方の地平をきはめず
暗鬱なる日かな

天日家並の軒に低くして
林の雑木まばらに伐られたり。
いかんぞ いかんぞ思惟をかへさん
われの叛きて行かざる道に
新しき樹木みな伐られたり。

新前橋驛

野に新しき停車場は建てられたり

便所の扉風とびらにふかれ

ペンキの匂ひ草いきれの中に強しや。

烈々たる日かな

われこの停車場に來りて口の乾きにたへず

いづこに氷を喰はまむとして賣る店を見ず

ばうばうたる麥の遠きに連なりながれたり。

いかなればわれの望めるものはあらざるか

憂愁の唇は酔え

心はげしき苦痛にたへずして旅に出でんとす。

ああこの古びたる鞆をさげてよろめけども

われは瘠犬のごとくして憫れむ人もあらじや。

いま日は構外の野景に高く

農夫らの鋤に蒲公英の莖は刈られ倒されたり。

われひとり寂しき歩廊ほろりの上に立てば

ああはるかなる所よりして

かの海のごとく轟ろき 感情の軌きりつつ來るを知れり。

大 渡 橋

ここに長き橋の架したるは
かのさびしき惣社の村より 直として前橋の町に通ずるならん。
われここを渡りて荒寥たる情緒の過ぐるを知れり
往くものは荷物を積み車に馬を曳きたり
あわただしき自轉車かな
われこの長き橋を渡るときに

薄暮の飢ゑたる感情は苦しくせり。

ああ故郷にありてゆかず
鹽のごとくにしみる憂患の痛みをつくせり
すでに孤獨の中に老いんとす
いかなれば今日の烈しき痛恨の怒りを語らん
いまわがまづしき書物を破り
過ぎゆく利根川の水にいつさいのものを捨てんとす。
われは狼のごとく飢ゑたり
しきりに欄干にすがりて齒を噛めども

せんかたなしや、涙のごときもの溢れ出て
頬につたひ流れてやまず
ああ我れはもと卑陋なり。
往くものは荷物を積みて馬を曳き
このすべて寒き日の 平野の空は暮れんとす。

廣瀬川

廣瀬川白く流れたり
時さればみな幻想は消えゆかん。
われの生涯を釣らんとして
過去の日川邊に糸をたれしが
ああかの幸福は遠きにすぎさり
ちいさき魚は眼にもとまらず。

利根の松原

日曜日の晝

わが愉快なる諧謔はいごくは草にあふれたり。

芽はまだ萌えざれども

少年の情緒は赤く木の間を焚やき

友等みな異性のあたたかき腕をおもへるなり。

ああこの追憶の古き林にきて

ひとり蒼天の高きに眺め入らんとす

いづこぞ憂愁ゆうしゆににたるものきて

ひそかにわれの背中を觸れゆく日かな。

いま風景は秋遅くすでに枯れたり

われは焼石を口にあてて

しきりにこの熱する 唾つばきのごときものをのまんとす。

公園の椅子

人氣なき公園の椅子にもたれて
われの思ふことはけふもまた烈しきなり。
いかなれば故郷こきやうのひとのわれに辛つらく
かなしきすももの核たねを嚙かまむとするぞ。
遠き越後の山に雪の光りて
麥もまたひとの怒りにふるへをののくか。
われを嘲あざわらけりわらふ聲は野山にみち

苦しみの叫びは心臓を破裂せり。
かくばかり
つれなきものへの執着をされ。
ああ生れたる故郷の土つちを踏み去れよ。
われは指にするどく研とげるナイフをもち
葉櫻のころ
さびしき椅子に「復讐」の文字を刻みたり。

郷土望景詩の後に

I 前橋公園

前橋公園は、早く室生犀星の詩によりて世に知らる。利根川の河原に望みて、堤防に櫻を多く植ゑたり、常には散策する人もなく、さびしき芝生の日だまりに、紙屑など散らばり居るのみ。所々に悲しげなるベンチを据ゑたり。我れ故郷にある時、ふところ手して此所に来り、いつも人氣なき椅子にもたれて、鴉の如く坐り居るを常とせり。

II 大渡橋

大渡橋は前橋の北部、利根川の上流に架したり。鐵橋にして長さ半哩にもわたるべし。前橋より橋を渡りて、群馬郡のさびしき村落に出づ。目をやればその盡くる果を知らず。冬の日空に輝やきて、無限にかなしき橋なり。

III 新前橋驛

朝、東京を出でて澁川に行く人は、晝の十二時頃、新前橋の驛を過ぐべし。梟の中に建ちて、そのシグナルも風に吹かれ、荒寥たる田舎の小驛なり。

VI 小出松林

小出の林は前橋の北部、赤城山の遠き麓にあり。我れ少年の時より、學校を厭ひて林を好み、常に一人行きて冥想に耽りたる所なりしが、今その林皆伐られ、檜、櫟、樺の類、むざんに白日の下に倒されたり。新しき道路ここに敷かれ、直として利根川の岸に通ずる如きも、我れその遠き行方を知らず。

V 波宜亭

波宜亭、萩亭ともいふ。先年まで前橋公園前にありき。庭に秋草茂り、軒傾きて古雅に床しき旗亭なりしが、今はいづこへ行きしか、跡方さへもなし。

IV 前橋中學

利根川の岸邊に建ちて、その教室の窓々より、淺間の遠き噴煙を望むべし。昔は校庭に夏草茂り、四つ葉のいちめんくろはらに生えたれども、今は野球の練習はげしく、庭みな白く固みて炎天に輝やけり。われの如き怠惰の生徒ら、今も猶そこにありやなしや。



前橋市街之圖

跋

萩原朔太郎！少年時からの懐かしさで、今では兄のやうに思へる。氏と語る時には、常に寡黙な軽い憂鬱さを知る。秀でた人のもつ善良の味だ。私は實にその偏奇な高潔さが好きだ。卓を挟んで拳闘家のやうに語り合ふ事は、極めて趣い。が、語る！

怒り、淋しい頹廢の怒り、閃く、自棄的な時、どこにも快活な、何物へも得意さと言ふものが現はれない日、病的な程堪へ難い日がある。また晴天の日、松林を走るやうな愉快な瘡の高い日の氏は、腸の蟲まで笑ひこける、押へつけられないやうな氣がする。其程、軽快な警句が躍り上る。

然し、一體に重い影の中に、氏の姿はある。

四月、自分が見すばらしい下宿の二階を間借りしてゐる氏を訪ねて、今度の「郷土望景詩集」の原稿を拜見した時、その多くが餘りにも、激越的な忍耐強い人のよくする

怒りが、綴られてゐるのに驚いた。其時、氏と散歩して來た、非感覺的な櫻の花が咲きみだれてゐた前橋公園や、かつて「雲雀の巢」に歌はれた堤防附近や、その他抒情的风景の多くが、氏にとつて内心の悪舌を吐きかける所となつてゐるのに驚いたのであつた。内心の悪舌は即ち内心の泣訴である。「友よ、君が生活を匿して、その魂を寄せ！」ギクトル・ユウゴウの言葉そのものが、その中にひそんでゐる。

氏が、郷土に於ける生活は、さなきだに因習的な莫迦らしい制度や、臆面もない抑壓的なものが、自然と外から内へまで、のさばり込んだらしい。それへの怒り！即ち生活的の苦は、藝術的の怒りとなつて現はれたのだ。自分はこの堪へ難いやうな作品を見た時に、藝術的であると云ふ言葉をもつて、之等の詩に對する事を排けなくてはならぬと思つた。何故なれば、餘りにも、藝術のもつムード以外の生活的悲鳴が、

之等を領してゐたからである。

「月に吠える」や「青猫」によつて氏を洞見してゐた讀者は、如何にこの詩集によつて驚異するであらう。以上の詩集によつて知らるゝ氏は、強い厭生思想者であり、神秘的な詩人である。この眼をつぶつた、齒を食ひしばつた怒りを知らない。この現實的な苦悶を知らない。

最近の氏には、今までにない内攻する苦悶が見える。田舎に住む事以外に、多岐の堪へ難い行き詰りがあるらしい。殊に何物かの甚だしい行き詰りがあるらしい。この詩集はそれへの一つの暗示であるやうに思ふ。

ともあれ、この詩集に於いては、孤獨に生きねばなられなかつた氏が、孤獨に生きる事の苦しさを告白した、悲痛なる一種の記録である。今、自分が氏に就いて語らう

とするのは早計である。けれ共、氏に就いて語らうとする者は、この詩集を繙いて、如何に如實なる氏を知る事が出来るであらう。生活者としての氏を識る者は、藝術家としての氏を敬する以上に、惱ましいまでの親和を感じるであらう。

尠くもこの詩集によつて、氏に一轉化の來たされんとしつゝあるは、誤らない事實だ。昨日の高踏的詩風に、この現實的なバックの浸潤を加へる事によつて、氏の藝術境は一層の深刻を加へる事であらう。私は此等の詩に接して、更に更に何等のあます所なく、どんなに愉快な喜びの念にうたれるか知れない。と共に、蓬酒のやうな生活の中に、隱忍的の苦を送つてゐられる氏を、強い感激的な念にうたれざるを得ない。以上を跋文の形として、日頃の喜びと、懐しさを、更に更に高く捧げたく思ふ私である事は、世の多くの讀者とまたすこしも變らないのである。

大正十三年初秋

萩原恭次郎

純情小曲集終

大正十四年八月五日印刷
大正十四年八月十二日發行

(定價八拾錢)



◀集曲小情純▶

著作者

萩原朔太郎

發行者

東京市牛込區矢來町三番地
佐藤義亮

發行所

東京市牛込區矢來町三番地
新潮社

電話牛込
八八八八
〇〇〇〇
九八七六
番番番番

番二四七一(京東)替換

印刷所

東京市小石川區西江戸川町
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社
印刷者 佐々木俊一

白秋詩歌選

北原白秋氏著 價五拾五錢、送料六錢(新刊)

純情小曲集

萩原朔太郎氏著 價八拾錢、送料六錢(新刊)

静かなる時

百田宗治氏著 價壹圓、送料八錢(新刊)

小曲詩集 はつ戀

川路柳虹氏著 價壹圓四拾錢、送料拾錢(新刊)

自然の恵み

生田春月氏著 價八拾錢、送料六錢(新刊)

死の島の美女

福田正夫氏著 價壹圓四拾錢、送料拾錢(新刊)

白秋氏の既刊詩歌集二十三卷に互つて其の精粹を抜くと共に、未發表の作をも併せ、『名作選集』中の一卷として公にす。「白秋綜合詩歌集」として詩を愛する人々の歡び迎ふることを信ずる。

少年の日の思ひ出に満つる「愛憐詩篇」と、最近の詩風を窺はしむる「郷土望景詩」の二篇に分つてある。その多くは、長く篋底に秘めて世に示さざりしもの。巻頭、室生犀星氏の序を掲げた。

百田宗治氏の作、由來平明にして素朴、純情にして眞摯、よく萬人の胸に響くの韻をなす。而も、時に激情の發するところ、二十五絃皆鳴るの觀がある。本集、これを證して餘りあらう。

美しくしき戀、悲しき戀、返へらぬ日の追憶、はてもなき憧れ、これ等若き日の夢のかずくを歌ひたるもの百五十篇、作者が抒情小曲のすべてを收めた。優麗可憐の美しき小冊子である。

最近の作を集めたもので、内省の人忍苦の人たる氏のあらゆる人間の試煉に堪へて漸く辿りつく事の出來た法悦境が示されてゐる。清らかな慰めに充てる一卷を惱める人に捧げたく思ふ。

幻の死の島、魔女の呪ひ、緑の海に浮ぶ戀の船、海底の宮の妖艶の人魚等、西方古譚に通ふ神秘境を背景として展舒する戀の三角關係を、深刻なる近代精神を以て貫ける「幻想詩劇」である。

現代詩人叢書

一卷百六十頁の間に各著者の代表的作品を網羅し、創刊以來文字通り飛ぶが如き發行を示してゐる。

恩地孝氏裝幀 價一冊六拾錢 送料一冊四錢

(1) 沈黙の血汐 野口米次郎氏著	(10) 古風な月 日夏耿之介氏著
(2) 蠟人形 西條八十氏著	(11) 愛慕 白鳥省吾氏著
(3) 預言 川路柳虹氏著	(12) 沙上の夢 野口雨情氏著
(4) 田舎の花 室生犀星氏著	(13) 遠き薔薇 堀口大學氏著
(5) 季節の馬車 佐藤惣之助氏著	(14) 蝶を夢む 萩原朔太郎氏著
(6) 青き樹かげ 三木露風氏著	(15) 耕人の手 福田正夫氏著
(7) 炎 千家元麿氏著	(16) 世界の民衆に 正富汪洋氏著
(8) 澄める青空 生田春月氏著	(17) 斑猫 深尾須磨子著
(9) 風車 百田宗治氏著	(18) 西歐へ行く 大藤治郎氏著

本邦唯一の年刊詩集

日本詩集

詩話會編

『日本詩集』は本邦唯一の年刊詩集である。各巻皆その前年に於ける現代詩人の殆ど全部の代表作を網羅した大詩集で、これを通覧すれば、一九一九年から最近に至る数年間の收穫は悉く看取される。各巻附録の詩論詩評も亦豊富である。

— 次 目 刊 既 —

■第一集	一九一九年版	三百五十頁	價一五〇	一〇
■第二集	一九二〇年版	三百九十頁	一八〇	一〇
■第三集	一九二一年版	三百七十頁	一六〇	一〇
■第四集	一九二二年版	三百九十頁	一六〇	一〇
■第五集	一九二三年版	四百四十頁	一八〇	一〇
■第六集	一九二四年版	四百十一頁	一八〇	一〇
■第七集	一九二五年版	四百三十頁	一八〇	一〇

詩話會編

神原 泰氏裝畫

災 禍 の 上 に

現下の我が詩壇の殆ど全詩人を網羅して四十八氏が、東京環滅の大凶災を歌へる新詩を集めた一大選集で、或は滅亡せる舊き東京への悲涙の挽歌があり、或はまさに蘇らんとしつつある新しき東京に捧ぐる新生の頌歌がある。ひとり詩壇の壯觀たるばかりでなく若き東邦の藝術界を代表する世界的大詩集である。

四六判紙装
定價壹圓五拾錢
郵送料拾錢

